

B 分科会：「総合型地域スポーツクラブについて（実践編）」

静岡県掛川総合スポーツクラブ（板垣晶行氏）は、市区町村の体育協会が中核となり年会費、入会費、会費を集め受益者負担、補助金に頼らずに財源の自立を図ることがスポーツクラブを設立する上で一番大切なことではないか、体育協会が加盟団体を取りまとめ競技スポーツをサポートし市民一人一人の生涯スポーツをサポートする、これからは体育協会の本来の役割ではないかと発表し、岐阜県ごうどスポーツクラブ（小倉弉郎氏）は、スポーツ少年団や学校もクラブに取り込み活動していると報告し、組織を運営するマネジメントすることが避けて通れない問題に、スポーツ界も突入してきていると、両氏から実例報告があった、ドイツに10年滞在していた（川瀬周平氏）は、総合型スポーツクラブをデパートに例え、各階ごとに世代で構成され1階、2階、3階、そして60、70、そういう形の多世代型の組織をつくることも必要であり、売り場は種目であり、商品(種目)は自分で選び、強制的ではなく子供が自分の意思に基づいて種目を選ぶ、店員は専門のスポーツ指導者で明確な知識を持ち、子供達にスポーツ指導していく、出会いの場であるスポーツ少年団が中核となり総合型スポーツクラブをつくることは出来ないかと提案があり、それらを踏まえディスカッションが行われた。

結果的には理想と現実の狭間に関して指摘はあったが、理想としては年代の壁、種目の壁、学校と地域の壁、生涯スポーツと競技スポーツの壁、それを取り外すのがクラブとして望ましい方向だとは言いが、その実現には難しい側面もあり、今後こういった形で地域という共通の基盤、もしくはスポーツというコンセプトの中で、生涯スポーツ社会をつくっていくことができるかということに対し、時代に応じて柔軟に変えていく必要があるということを確認した。